村上忠順翁顕彰会報

村上忠順翁顕彰会報　第19号

編集　村上忠順翁顕彰会 事務局

発行　平成20年３月15日

目　　次

・設立二十周年を迎えた
　村上忠順翁顕彰会……2
・村上文庫と江戸の
　食文化を訪ねて……3
・歴史探訪　水口・土山の宿…3
・村上忠順の未刊書の序文……5
・「忠順　ありがとう大賞」……7

設立二十周年を迎えた 村上忠順翁顕彰会

村上忠順翁顕彰会 会長　近藤光良

村上忠順翁顕彰会は平成元年に設立された組織であり、今年は設立二十周年にあたります。私たちのように五十～六十歳代の人たちは、小学校時代の道徳の時間に、副読本「郷土の偉人」の中で村上忠順について学んだ記憶があると思います。しかし、郷土が生んだ偉い人だという以外は、詳細についてよく覚えていません。

この地域が発展するにつれて、地域の伝統文化や歴史が忘れ去られていくことはよくあることです。しかし、こうしたことは、同時に地域の誇りをも捨ててしまうことにもなりかねません。このような危機感を抱き、改めて、地域が輩出した偉人「村上忠順」の業績を検証することにより、地域の皆さんの心のふるさとをしっかりしたものにしたいとの地域の有志の方たちの思いからこの顕彰会が設立された、と聞いております。設立以来はや二十年が過ぎました。長い年月の間には紆余曲折があったと思います。しかし、これまで多くの会員、自治区の皆さん、更に豊田市郷土資料館など多くの方の御支援と御協力のお陰で、ここまで存続することができました。大変感謝申し上げます。

現在顕彰会では、秋の「歴史探訪」、女性部による江戸時代の歴史を訪ねる会、年4回の「四方樹大学」で愛知教育大学名誉教授新行紀一先生による村上忠順著「座右記」の解読、更には昨年から「村上忠順ありがとう大賞」を開催しております。新行先生による「座右記」の解読では、村上翁の人間的な姿と、激動期の江戸の社会を知りたいとの思いから開催いたしました。参加者は毎回十名余ですが、読み進むにつれ村上翁の人間臭さと、江戸末期の社会像が浮き彫りにされて興味深く聞いております。詳しくは、会員の皆さんに配布されております解説書をお読みいただきたいと思います。

「村上忠順ありがとう大賞」には、小学生、中学生をはじめ、多くの市民の方達から応募をいただき、優れた作品の方にはささやかながら賞を授与させていただいております。この活動を通じ、村上忠順に関心を持っていただくとともに、顕彰会を知っていただきたいと考えております。

最近私どもにとってうれしいニュースがふたつありました。ひとつは、一昨年念願の村上忠順翁のアニメが市の協力で完成しました。市の図書館、小・中学校、交流館でご覧になれます。もうひとつは、高岡町に残存する村上忠順が使用していた書庫「千巻舎」と表門が、村上家の協力もあり、豊田市の文化財に指定され、老朽化の激しかった建物が修復されることとなりました。修復後の利用については詳細が決まっておりませんが、地域文化の拠点として、また当顕彰会の活動の場としても活用できるよう市、村上家と協議して参りたいと考えています。

当顕彰会は二十周年を迎えたとはいえ、まだ二十歳になったばかりです。もっと多くの皆さんに知っていただき、地域はもとより豊田市の誇る村上忠順翁となるには一層の努力と、会員の皆さんの御支援が必要と痛感しております。

今後とも会員の皆様からの率直な御意見をいただきながら、役員一同、顕彰会の更なる発展を目指して精進してまいりたいと思います。

村上文庫と江戸の食文化を訪ねて

高岡町　塚本　房代

八月一日の女性部会小旅行は、「忠順ありがとう大賞」金賞に入選された、甲村サカエさん作の

七十路に入りて出逢えり忠順の
歌集ひもとく至福の夕べ

の詠み上げから始まり、忠順さんの心が現代の人々に歌の素晴らしさを伝えて下さっているように思い、この小旅行の行く先々の楽しみを予感するものでした。

先ず、初めに訪れたのは、現代の最先端を行く中部国際空港セントレアです。私にとってセントレアは旅行の時の出発ロビーと到着ロビー、また、食事やお土産の銘店街しか見ていませんでしたが、今日は、ターミナルツアーのため、一階のウェルカムガーデンより入ったので、正面の壁に、高さ三メートル、横二十七メートルのセラミックアートの歓迎を受け、ガイドさんに、空港内の普段は見る事の出来ない所などを案内して貰い、帰りには、見学証明書を頂くと云う喜びでした。

次に、「江戸の食文化」現在の握り鮨の原点になる早寿司を、昼食に体験させて頂きましたが、正直、美味しいとは思いませんでした。江戸時代には、酢の味は画期的な調味料だったと思いますが……そして、「酢の里」博物館、何度来ても変わらぬ、酢の香りに満ちた風景にも、今回は、昼食の早寿司から時間はあまり経っていませんのに、酢を通し時代の変遷を味わってみたひと時でした。

旅も、知多路から三河路へと進み、忠順さんがお勤めになった、刈谷藩城跡亀城公園、そして、私にとって今回の最大テーマである「村上文庫」に入りました。書物は最良の環境の中で保管されていることに、如何に貴重な書物であるかを感じ、また、書物の多さに感心しながらも、歌集のところでは足を止めました。花、雨、四季等、医学書もありました。全てが墨で丁寧に書かれていたことに感動の連続でした。今回の女性部会の企画は、人間の五感を通して、見る、聞く、香る、食べる、触れる。そして、心にふれる、楽しい一日でした。

「村上文庫」は、私の心にふれる企画でした。

心にふれる村上文庫

歴史探訪

水口・土山の宿

駒場町　清水千恵子

曇り空を眺め肌寒い朝、十月二十五日、村上忠順翁顕彰会歴史探訪の旅に参加させて頂きました。

「坂は照る照る　鈴鹿は曇る
あいの土山雨が降る」

この歌の説明を聞きながら峠を下ると、何処からともなく馬子の鈴の音が聞こえそうな雰囲気。忠順翁五十七歳の時、有栖川宮の西下を岡崎に迎え、供奉し、京に向かう、そこからの旅。東海道五十三次宿場町を訪ねる旅です。世の中の流れを変える意思のもと、要職に就きながら旅に出向き、見聞を広め、短歌を詠み、一日十キロ近く歩く、頭脳明晰は言うに及ばず、強靭な体力を持った方と改めて感じました。旅の友として、児島基隆（画家で深見家の親戚）忠順翁の娘愛子の夫、新堀村の豪商深見篤慶、愛子の妹の養子、鈴木重愛の四人旅。凡人の卑しい考えで旅をするには、用立てするのも大変難

儀だったと思います。深見家は、大スポンサーだったと聞きます。現代の世にも通じることとつくづく感じます。鈴鹿峠を越えて二里、雨の降る度に横田川は溢れ、大洪水に遭うため橋は架けず、渡し舟が交通手段。苦労の様子が想像されます。明治元年九月に時の明治天皇が通られきれいに整備されました。

その二ヶ月後に忠順翁が旅され詠まれました。

「横田川　よこさのあくハ　平らげて
かへらすとふハ　のどけかりけり」

説明を聞きながら、道の駅「あいの土山」で小休止、土山宿に入る。少し勾配のある幅広い道、塵一つ感じさせないすみきった空気、そんな中に立っている自分が不思議な気持ちになる町並み。幕末の志士、殿様、天皇、文化人が立ち寄られた地。土山本陣・一里塚・旅籠と名所旧跡の多い所。郷土を愛し保存に努められている様子が伝わってきます。人の往来が多ければ活気ある町、輸送用の馬、伝馬の荷物を運ぶ姿も広重の絵になったことでしょうか。会長様のお話の中に「頓宮」と言う耳馴れない地名。天皇が即位される度に伊勢神宮に奉仕する未婚の皇女を斎王と言い、頓宮は斎王の宿泊所。斎王を務めた徽子女皇は、娘の規子内親王が斎王として山河を越えて伊勢に行くことが忍びなく、その旅に付き添ってこんな歌を詠まれました。いつの世も子供を思う親の気持ちは変りません。

「世にふれば　又も越えけり　鈴鹿山
昔の今になるにあるらむ」

内親王も返歌として

「鈴鹿山　しずのをだまき　もろともに
ふるにはまさることなかりけり」

昔の女性の運命を感じます。京に近いこの地に頓宮茶とか名称として使われているのは、今で言うブランドを意識したのかもしれません。

賑やかな通りを廻り、楽しみな昼食は割烹「や満平」盛り付け味もよい懐石膳に舌鼓を打ち大満足でした。さりげなく飾ってある軸に目をやれば、巌谷一六の書。さすが老舗の格を感じました。巌谷一六は、明治を代表する書家（習字の教科書を作った）。その子、巌谷小波は、児童文学の創始者。水口町が忘れてはならない人物です。水口は、古くから伊勢に通じる街道の要所としてひらけ、宿場町になっていました。五町が合併し、甲賀市となった今日も市の中心都市として活気ある町に見受けられます。徳川が天下を握り、三代将軍家光が上洛に先立ち、水口城を築かせました。明治維新後は、廃城となり売却されました。滋賀県の史跡に指定されたのを機会に、郷土のシンボル水口城資料館として建てられ、凛とした姿で見おろしているようでした。外堀の木々に少し秋色の紅を見つけ、水口藩の中心として栄えた遠い昔に思いを巡らせ後にしました。

三関の一つ関宿に足を運ぶ。小さな坂を登ると遠くの山々が一望でき、両脇の家々に懐かしいたたずまいを見る。昔の人と同じ風景を眺めた気分になり癒されました。電線が地下に埋めてあり、建造物を守り、地域を愛し生活されている様子が伝わってきます。身近であって足を踏み入れてない場所、東海道五十三次鈴鹿の旅も終りに近づく。新名神亀山―大津間の開通を来年二月に控え急ピッチで進む工事を見ながらトヨタ会館に到着。住みよい地球と豊かな社会生活を実現するためをモットーに、環境に優しい車、世界初のハイブリッドカープリウス、事故をおこさない車の取り組み、かっこいいスポーツカー、高級車の最新モデル車の展示、パートナーロボット等々、目を見張るばかりでした。

今日一日で、幾百年前への思いと最先端の技術を一度に味わい、とても楽しい旅でした。

車を提供下さったトヨタ自動車、安全運転に心がけ、一日中ハンドルを握って下さった運転手様、役員の皆様、この旅の事前準備にお骨折り下さった事務局の皆々様に心より感謝致します。誠に有り難うございました。

伝馬館（甲賀市の土山宿にて）

村上忠順の未刊書の序文

中澤　伸弘

村上忠順は安政二年の秋に江戸へ趣いた。この二年前の嘉永六年に父忠幹を亡くし、家督を継いだあとのことであつた。忠順はこの時に江戸で名高き歌人を訪うてゐるが、その中に小林歌城がゐた。歌城は清水濱臣の門人で当時は八〇歳を越える年であつた。忠順は歌城から歌の、殊に文法に詳しい歌城ゆゑ、文法関係の教へを受けたことと思はれる。安政の大地震の一か月前の事であつた。帰宅後忠順は歌城に歌文の添削を願つたとみえ、現在村上家にはこの歌城が添削をした忠順の歌文草稿が九冊伝存してゐる。何れも右肩に忠順の文字で「小林先生（大人）添削」とあり、年次の明記の有るものは、「安政三年辰十一月来」「安政四年」「文久」などの記載がみえ、安政三年から文久にかけて、かの江戸行の後に添削を依頼しはじめたやうである。それは歌城最晩年のことであつた。そのうちの一冊には「安政四年小林翁病中吾鬘代点」とあり、歌城の代はりに尾張藩士で江戸詰めの寺山吾鬘が朱を入れたことがわかる。

歌文を綴じて江戸の歌城の許に送り、朱を入れて送り返すと言ふ、今日言ふ通信教育が既にこの頃なほ盛んであつたことがうかがへる。ここには歌は勿論のこと幾つかの文章があり、またその中に未刊に終はつたと見える書物の序文があることは、この歌文草稿の価値を高めてゐる。忠順自身の著作もあつただらうし、また誰かからの依頼もあつたことと思はれ、その人間関係が伺へるものでもある。ここには次の七種の序文がある。

雅言訳解拾遺序（忠順著）
名所栞序（忠順著）
序跋文集序（忠順著か）
小車集序（土井利善著か）
和漢草序（千種有功著）
古鏡百首序　附詠赤穂義士歌
（千種有功著）

このうち『和漢草』については、その刊行に忠順が関係したと言ふ事を書いたことがある。（日本古書通信　平成十九年四月号）また忠順は同じく千種有功の『古鏡百首』に有功が詠んだ赤穂義士を称へる歌をあはせて刊行するつもりでゐたやうである。千種有功は堂上の公卿で歌人として名高く、また公家でありながら多くの人々と交はり、嘉永七年に逝いてゐるので、この時には既に故人であつた。赤穂義士を称へた有功の歌は今日伝へられてゐるが、この古鏡百首は何であらうか。有功には古今集の歌に倣つて詠んだ『古鏡』と言ふ歌集があり、これは弘化二年に刊行されてゐるので、これとは別のものである。なんにしろ有功の歌を纏めて出版する意図はあつたのである。序文は言ふ、

百首古鏡序　附詠赤穂義士歌

今の世に百人一首と名づけてもてはやすものは　嵯峨の中院の障子にものせむとて京極の中納言の君に筆そめ給ひてよとて蓮生法師がこへるものなるべし　さればこれえらべるは中納言にまれ入道にまれかりほの庵のかりそめなる筆にて　思ひ入山の奥のおくふかきわざにはあらざらめとぞにしてはなにはづ渉り山口ならざらむ人はさら也　野山の牛の角もじも書あへぬ草刈わらはも　みなよく空によみうかべてとなへもし　うたひもするはその歌どものいみじうめでたき故にこそ　此ころ千種君のかの百首によりてよみ給へるを　これは高津の峯のたかきしらべにて　天の香山のかぐはしき言のはども　田子の浦より打ち出て不二に争ふ姿とぞいふべかりける　かかるめでたき百歌なれば片山蔭に柴刈をのこ　田におりて根芹つむめのわらはにもいひをしへて　かの百首とひとしなみにうたはせまほしくなむ　まことやこのおくに書なへたる五十首も同じ卿の赤穂の□等が百あまり五十歳にあたれる年よみ給へりとぞ　此義士どもの忠なる事はかの□百首と同じく世の人の普く知たる事なればさらにいふべくもあらず　大かたは泉岳寺に立たる碑のかず四十あまり六人を世にはしれるをいまは寺坂　橋本　萱野の三人をくはえ節女義僕等をもたゝへたまへるこそおむかしけれ　この節女義僕等が事は畸人傳　名家略傳などなにくれの書どもにいと多くみえたればいはず　あはれめでたき言の葉のたゝへ言をば天かけりてもめでざらめや　あはれやむ事なき君の手向草をば苔の下にも悦ばざらめや世の人の鏡なる義士どものたゝへ歌を百うたの古鏡に書ついでたるもよしなきにはあらずや　これをも口ならして人の鏡となるべきまめ心をふりおこすべくなむ　（文章は歌城の添削後のもの、濁点は適宜付した）

これによると『古鏡百首』は小倉百人一首をもとに有功が詠んだ百首と言ふことがわかる。また義士の歌には、その百五十回忌に詠んだものであり、それは嘉永三年の事であつた。未刊の有功の歌を

このやうに編集して刊行しようとの考へは、『和漢草』を刊行した意志と通じ、忠順には有功への只ならぬ思ひがあつたことを証してゐよう。結局これは未刊で終はつた。『名所栞』は忠順の著作で刊行されてゐて、この序文も付されてゐる。『序跋文集』は歌文の手本にと忠順が序跋文を集めたもののやうであるが未刊であり、その内容は不明である。『小車集』は古川松根の歌集に同じものがあるが（慶応二年刊）この序文に関するものとは別物で、そのことが序文から伺へる。

小車集序

我君あした夕に御弓いたまひ御馬にのらしたまひ　たちはきしたまふ事はさらにもいはず　さるべき御いとまのひまには　たけき武士の心をもなぐさむといふ歌の道にも入たちたまひて　猛くも雄々しくもみやびかにもおはしますみ心ばえなむ　いというに愛たく侍りける　さる御心じらひよりよみ出たまへる御歌どもの数つもりぬるを一つに書あつめたまひて小車集となはなづけたまひける　かく名づけたまうはおもはずよしある事は承り侍れど　その□ゆゑよしはおろかなる忠順がうかがひしるべき事にあらねばいかがし侍らむ　そはいかにもあれあるはをゝしくあるはたけ高く　あるはたくみなるあるはえむなるとりどりに　目もあやになむ見奉れば小車の錦とこそはたゝへまつらめかくて年月におりいでたまはむには千村五百村錦の山なして　力車に七車つけあまるばかりになりなむにはめでたく侍らめ　うつくしき錦のはしにあやしうやつれたる麻布のあさはかなる言のはをつづりそへむ事はふさはしからぬわざにし侍れどおほせ事のいなみがたければのたまはする随にかしこまりてかくものし侍るはおほけなきわざになむ

ここに言ふ「我君」は忠順が仕へた刈谷の土井利善侯であらう。利善に『小車集』と言ふ歌集があり、そこに忠順が家臣として恐縮して序文を寄せたのである。この歌集も刊行されてはゐないやうである。

『雅言訳解拾遺』は尾張の鈴木朖の著作である『雅言訳解』に漏れた古語を集め、同じ体裁で明治初年に刊行したものである。ただ単独では刊行されてゐないやうであり、朖の著作を上として、忠順のを下とし、二冊一組の形で名も『雅言訳解大成』として世に出た。（但し下の内題は「雅言訳解拾遺」とある。）そのためここにある忠順の序文は削除されてゐるが、単独のものがあれば序文も備はつてゐるのかもしれない。序文はその成立に関して述べるのでここに挙げる。

雅言訳解拾遺序

鈴木翁があらはせる雅言訳解といふ書は初学のためにはいとたよりよきものなりとてあがなふ人々多かりとぞ　さるから書あき人のためにもさちありといへり　かかれば此頃文華堂のあるじかの訳解のゑり板を求め　之家のたからとしてすりてしたてて世にひさぐにつきて拾遺といふものやあると尋ぬるに　翁ははやう無人にてその草稿ありとしも聞えねばせむすべなし　いかでさる書ものしてえさせんやとこふに　そはいとたはやすきわざなれど　此頃となりてはさるかたの書とも世にいと多かれば徒になるこそとてうべなはぬをさても猶いかでいかでとこふままに　さのみはとて其夜より筆おこして十夜あまり二夜三夜に書をへたるは　やがて此一とぢになむ言葉といふものかぎりなく多かるものにてささやかなる此一巻につくすべくもあらねど　とみのしわざにて心ゆかぬ事のみは多かるされど前編と古言訳解とをあはせ見むにはいささかたすくるやうも有なむかし　こはわづかに書屋がせめをふさぐためにこそ

これによるとこの書は朖の『雅言訳解』の板木を名古屋の文華堂美濃屋清七が手にいれ、それの拾遺について忠順に質問したことによる。「家のたから」と言ふことからだいぶ売れ筋の良いものであつたやうだ。書店が拾遺を付けたがるのもわかるものである。忠順はその申し入れを聞いて、十二三日で書き上げたと言ふのだからその言葉に関する力量が伺へよう。書店美濃屋は忠順をあてにして正解であつた。ここに言ふ『古言訳解』は萩原広道の著作で、同じやうに古語を簡単に解説したものである。さらに面白いのは忠順は歌城に対して「家のたからとしてすりてしたてて　云ふ此語ども俗言に侍らんか」と質問を書きつけてゐるのである。これに対して歌城は返信を書きつけてゐるが、晩年の悪筆はなかなか判読しづらい。「いづれも大に御上達被成候」とあり、訂正もしてないので、この表記を認めたのであらう。そして最後に「上木候はば一本御恵可被下候」と書き加へたである。このあと歌城は逝き、この本は明治になつて刊行されたやうなのでたうたう歌城は本書を手にすることはなかつたのである。

忠順 ありがとう大賞

今年も、「忠順ありがとう大賞」に多くの方が作品を応募してくださいました。いろいろな感謝の気持が込められた作品、一、二〇五首の中から入賞された方の作品、二〇首を紹介します。今回も、永井公博先生が選者を務めて下さいました。また、入賞作品に講評を添えて下さいました。

◆小学生の部◆

豊田市長賞

堤小　一年七組　ひがしでけいか

おとうさんいつもおふろでありがとうかみのけきれいこころもきれい

※お父さんとの入浴で、洗髪していただいている喜びが詠まれています。すっきりとして、「こころもきれい」とは、うまく言いましたね。

豊田市教育委員会賞

堤小　六年二組　宮地　詩織

お母さんはずかしくってありがとう言えなかったけど今は言えるよ

※「ありがとう」の言葉が恥ずかしくて言えなかった。でも、今は言えるようになった。成長への感謝もこもっています。

会長賞　金賞

堤小　一年四組　かわむらりりか

おばあちゃんおいしいやさいありがとうまたいっしょにおいもほろうね

※野菜作りをして下さるおばあちゃんへの「ありがとう」ですね。また一緒においも掘りしようという心持ちが「ありがとう」の表れです。

会長賞　銀賞

堤小　一年一組　すぎもとれのん

おじいちゃんおいしいやさいくだものをつくってくれてありがとうね

※おじいちゃんへのお礼ですね。「おじいちゃんの作ったトマトを自分でとっていっぱい食べたよ」と、添書きがありました。

会長賞　銅賞

堤小　四年四組　浅野　彰太

下校のときみていてくれてありがとう緑のおじさんぼくらは安全

※下校時の安全を立哨して下さる緑のおじさんへの感謝です。お礼のご挨拶を大きな声でして、通りましょうね。

中日新聞社賞

堤小　六年四組　石川　嵩

イギリスでつらい気持になった時うれしかったよみんなの手紙

※渡英中、英語がうまく話せず友達が出来なかった時、日本の友達からの手紙に元気づけられた。とメモにありました。日本の文字と言葉の心の手紙はさぞ嬉しかったことでしょう。

優秀賞

駒場小　三年一組　坂田　彩夏

おかあさんいつもえがおでありがとうそのえがおこそ心のささえ

※お母さんは、家庭の太陽ですね。優しい笑顔が、家族の心の支えですね。あなたも、そんなお母さんのような人になろうね。

優秀賞

堤小　二年六組　野田　和希

おとうさんキャッチボールありがとうぼくもいつかは子どもとやるよ

※お仕事の余暇にキャッチボールの相手をして下さり嬉しいですね。下句にあなたの気持が出ていて佳いですね。

優秀賞

堤小　五年一組　山領　紅葉

お母さんいつもどたばた大変だ疲れはいつもほぐしてあげる

※多忙なお母さんへの思いを詠んでいます。疲れをほぐしてあげたいという心持がうれしいですね。

優秀賞

駒場小　四年三組　杉浦　星花

おともだち感謝してる振りむけば横にいる君ずうっといるよ

※お友達は、自分の分身みたいです。心の中にはいつもいつも居ます。そうした友達を大事にしましょう。そして、自分も友達に思われるような人になろうね。

◆中学生・一般の部◆

豊田市長賞

前林中　三年五組　川村　実鈴

お母さん数えられないありがとう大きな心大切な人

※お母さんへの感謝の気持ですね。

「数えられないありがとう」の句が住いですね。あなたも「ありがとう」をいっぱい言われるような人になろうね。

教育委員会賞

高町　一般　久保　充恵

「ばあちゃんのよう」と生徒ら本音はき笑顔をくるる相談員吾に

※中学校の相談員の作者に心を開いて本音を言って呉れる生徒。相互の信頼感は、ありがたいものです。

会長賞　金賞

前林中　一年四組　竹間　悠太

ありがとうそのひとことですごく良い気持になれる魔法の言葉

※「ありがとう」の言葉をよく考えてみると、大変深い意味と、大きな働きを持った言葉ですね。「魔法の言葉」とは、言い得て妙です。

会長賞　銀賞

前林中　二年二組　上野　志織

ありがとう離れていても同じ空ずっと一緒よベストフレンド

※添書きに転校した友達への気持と、書かれてありました。あなたの思いは、きっとお友達にも通じていることでしょう。

会長賞　銅賞

市木町　一般　長谷川知子

幼い日着た浴衣いま子に着せて手と手を繋ぐ昔の自分と

※現在の境遇への感謝と喜びの気持がにじんでいます。結句が大変巧みです。

中日新聞社賞

明和町　一般　佐久間有希子

夜ごと鳴る単身赴任の夫からの電話の着信優しい調べ

※留守家庭を気遣ってのお電話は、嬉しいですね。夫君も電話に元気付けられてお励みのことでしょう。

優秀賞

前林町　一般　本多マツエ

夫（つま）と来て先祖（みおや）偲び墓碑洗う姑（はは）の形身のちゃんちゃんこ着て

※夫君と連立っての墓参。人のご縁の有難さを深く感じます。

優秀賞

高岡町　一般　早川　寛子

学校で忠順翁を学びし孫と訪（と）う御邸の年経て重し

※お孫さんとの探訪、素晴しいことですね。結句は歴年の重おもしさと、翁の遺徳の重さを、重ねられた言葉でしょう。

優秀賞

前林中　二年一組　林　達也

おいしいな毎週食べる豚しゃぶのいのちをくれた豚に感謝

※添書きに、毎週豚のしゃぶしゃぶを食していて、命を呉れた豚に感謝したいとあります。食前食後の挨拶は、生命をくれた動植物への感謝です。心を込め合掌して食事をしましょう。

優秀賞

前林中　三年二組　林　香菜

ありがとうあの時君に言われたことば今の自分を作れた言葉

※かつての友の忠言が役立って今の自分があると反省しての感謝でしょう。人は、お互いに支え合い励まし合って生きるものです。それに心掛けて生活しましょう。

編集後記

※本顕彰会は、創立二十周年を迎えます。そこで、平成二十年度は、少しでも多くの方に、忠順翁に対して関心を持って頂けるようにしたいと考えております。忠順翁に係わる資料の展示、忠順翁の勤務地刈谷市の方々との交流等々。具体的には、これからのことですが、決まり次第会員の皆様にお知らせいたします。ぜひ多くの方が参加していただけることを期待しております。今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

※表紙の村上忠順遺跡地の碑は、昭和五十七年、豊田市によって建立されたものです。その碑の北側に、豊田市の文化財に指定された村上忠順邸があります。静かな佇まいに当時の面影が偲ばれるようです。

※今年も、この会報を発行するにあたり、皆様のご協力を頂き感謝しております。

（事務局　酒井）